

1 概要

- ・ 担い手が減少し、耕作放棄地が増加する現状を打破し、持続的に高収益を得ることのできるカンキツ作経営を実現することは、傾斜地の多い我が国の西南暖地の農業を維持発展させるための喫緊の課題である。
- ・ このため、平成26年6月に上浦盛マルドリ会を設立し、複数の生産者がコストの削減と技術習得の促進を目的として、7戸の担い手農家が122aの実証園地で団地型マルドリ方式の導入を行うこととなった。



(設立総会の様子)

2 攻めの農林水産業を踏まえた取組の特徴

- ・ コンソーシアムの中の一つで事業を活用し、各方面の知見集約で総合的なカンキツの省力化・安定生産技術の実用化を目指す。
(攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業)
- ・ 団地型マルドリ方式施設を設置して実証体制の構築を図る。
- ・ 団地型マルドリ方式施設とICTを活用した営農支援技術を実証する。
「上浦盛マルドリ会」の組織化を図り、運営方法を定めて、団地型マルドリ方式の施設を試作設置し、実証体制を構築し、栽培支援システムの導入と活用方法について、情報の共有化を図るとともに、マルドリ方式栽培の技術や試験内容についての技術や試験内容の理解を深める。さらに、団地型マルドリ方式とICTを活用した生産支援技術を用いた持続的な収益性の向上を図ることとしており、平成26～27年で取り組む計画である。



(マルドリ方式導入園地)

3 今後の展開方向

- ・ 団地型マルドリ方式とICTを活用した生産支援技術を活用して、産地として持続的な収益性の向上を図る方策を明らかにすることとしており、平成26年度は、「上浦盛マルドリ会」の組織化を図り、運営方法を定めて、団地型マルドリ方式の施設を試作設置し、実証体制を構築する。また、栽培支援システムの導入と活用方法について、NECソリューションイノベータ(株)などと検証し、タブレット端末の活用による情報の共有化を図るとともに、マルドリ方式栽培の技術や試験内容についての講習会を開催し、技術や試験内容の理解を深め、傾斜地におけるカンキツの省力化と高品質安定生産の実用化を図る。

(位置図)



1 概要

- 河内晩柑の全国一の産地である愛南町で、河内晩柑を中心とした生産・販売に取り組み、経営面積10ha(うち自己所有3ha、借入7ha)、粗収益6,500万円(平成24年産)を実現。
- 河内晩柑を貯蔵しないで収穫まで樹上で完熟させる「木なり栽培」にいち早く取り組み、多様な販売形態と他品種との組み合わせで、長期出荷体制を確立。
- 平成24年に株式会社吉田農園として法人化、9名の雇用を総て地元の人で担い、地域雇用に貢献。



(木成り栽培の様子)



(株式会社吉田農園)

(位置図)



2 攻めの農林水産業を踏まえた取組の特徴

- 耕作放棄地を含めた農地の集積を進め、現在では、経営移譲時と比較して3倍以上にあたる10haまで規模を拡大し、地域の担い手として耕作放棄地解消に貢献
- 油圧ショベルによる園地の平坦化や園内道整備に取り組むとともに、選果機やフォークリフト等の機械・施設を積極的に導入し、作業性の向上を図る。
- 河内晩柑が美味しい時期に自ら値段をつけて販売したいとの思いから、平成9年から個人販売に取り組みインターネットやダイレクトメールを活用した宅配や市場出荷、デパート等の委託販売を組み合わせた多様な販路による流通販売
- 生産量の増加に合わせて、顧客管理や経営管理をIT化するとともに、雇用者の人材育成と労働力確保を進め経営を合理化。
- マスコミ等を通じて、河内晩柑を全国に発信し、消費拡大に努める。

3 今後の展開方向

- 規模拡大により河内晩柑の生産量が急激に増加してくることから、高品質・安定生産はもとより安全・安心に対する消費者の要望にも積極的に取り組む。
- 地元商工業者との連携で開発した加工品の生産販売にもチャレンジし、さらなるブランド化や販売チャネルの拡大などを進める。